

お正月を迎える度に思い出す歌があります。トンチ話の一休さんで有名な、臨済宗の禅僧である一休いっきゅうぜんじ禅師の歌です。

「門松は 冥土めいどの旅の 一里塚いちりづか めでたくもあり めでたくもなし」

一休禅師は、この歌を表すかのように、正月にしゃれこうべを付けた杖を持ち、「ごようじん、ごようじん」と叫びながら、京都の町を練ねり歩いたそうです。

お正月のめでたさのあまり浮かれている人が多い中で、人の頭蓋骨すがいこつによって、「人は誰も年をとる中で、一步一步死に近づいている。年明けがめでたいのは良いが、死に近づくのはめでたいのだろうか？」との問いを示したのです。

当時の年齢は、満年齢でなく数え年で数える習慣ですから、年明けと共に、一歳年をとったこととなります。年をとるということは、それだけ死に近づいていくことなのです。お正月の華やかなめでたさの裏には、少しずつ死に近づいていく現実が潜んでいるのです。一休禅師は、無常むじょうである現実を見つめ、示していたのです。

さて、小学校の冬休みの宿題に「書き初めそ」があります。書き初めは、正月二日ふつかに初めて文字を書く風習です。

曹洞宗の僧侶は、この書き初めに「遺偈ゆいげ」を書くことが昔からの習わしならとされています。「遺偈ゆいげ」とは、僧侶としての自らのあり方や生き方、禅の境地などを示す、いわば「辞世じせいの句」のようなものです。いつ自らの死が訪れてもいように、曹洞宗の僧侶は、年の初めにこの「遺偈ゆいげ」を認したためるのです。

一休禅師の歌や「遺偈」のように、年の初めに無常である現実をしっかりと見つめ、その無常の現実の中に生きながらも、お正月を迎えられたというありがたさをめでたく感じたいものです。

書き初めは、明るい言葉を書くことを習わしとしてしています。「一年の計けいは元旦にあり」。みなさんの書き初めの文字が、新年を照らす明るい言葉であることを願っております。